

飛行学校

小学校の転校が相次いだ私も、四回目の福岡県嘉穂町の学校でようやく落ち着いた。中学

は地元の嘉穂中学に進んだ。旧制五高、東大と自分の歩ん

私の履歴書

一 匡 頭 江
いち きょう けしら え

④

とんどしなくなった。当然、学校の授業が面白いわけはない。そのころの自分を振り返ってみると、われながらあきれるほどに父親泣かせであり、教師泣かせだったと思う。

授業を抜け出してプールで泳ぐ、買い食いをする、カンニングはするで、すっかり学校中の有名人になった。職員室に立たされた回数は、今でも学校記録。担任には、アウトローのように

家出に父も折れる

浜松航空隊候補生で終戦

扱われた。卒業式の当日も式には出させてもらえずに、特別授業を受けさせられたほどだった。

また、そのころ、母方の親戚

だコースに息子も歩ませたいと思う父に、「慶応か早稲田に行きたい」というと、「あれは私学で大学ではない」と認めてくれない。どんなに頑張っても五高、東大には行けないことは自分が一番よくわかっている。将来への道を閉ざされた感じで、それからというもの、勉強をほ

るため家出をした。三月月ほどたって私を連れ戻しに来た父も、やむなく折れ、米子の航空乗員養成所に入所することになった。

「好きこそものの上手なれ」ではないが、飛行学校では中学の時には信じられないほど勉強が楽しかった。航空力学や気象、通信など試験となると、便所の豆電球の下でも勉強したものだ。入所後半年ほどたったころ、

将来、大型輸送機は飛行艇の時代になるだろうと少年ながらに予測。自ら希望して大津の天虎航空乗員養成所に入所し、水上飛行機の訓練を受けた。

米子、大津と一年近く訓練を

いわなかった。そこで飛行学校の卒業目前に、一九四二年、大受験に臨んだ。慶応は失敗、結局、明治大学専門部に入学した。

四三年に徴兵検査があったが、結核で大量の咯血（かつつけ）をしていたため不合格。翌年まわしにしてもらった。一年で結核を克服し、四五年



養員航空乗員大津の成所時代の筆者

持ち続けてきた資産も一切ゼロになった。お前は自分で生きていきなさい。そこにはかつてのさっそうとした面影はすでになかった。

造り酒屋が実家

一月に浜松航空隊に特別操縦候補生として入隊。次々と仲間が戦死していく。明日は我が身」と覚悟していた時、八月十五日の終戦を迎えた。

だが、終戦直後のこと。とんでもないデマが飛び交った。我々パイロットは、「二度と操縦桿（かん）を握れないように、

で、三菱の幹部社員の実家に育ってきただけに、「我が家は裕福だろう」とのんきに構えていた。戦争も終わり、これからまた大学に戻ってという気持ちでいったん帰って来たのが、のっけからこの話。自ら切り開かねばならない戦後人生が、ここから始まった。

(ロイヤル創業者取締役)